

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 15 日現在

機関番号：11301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2012

課題番号：23710051

研究課題名（和文）よそ者と住民の協働による地域環境保全のための実験研究

研究課題名（英文） Experimental Study on Local Environment Conservation by Collaboration of Strangers and Residents

研究代表者

小山田 晋 (OYAMADA SHIN)

東北大学・大学院農学研究科・教育研究支援者

研究者番号：90593137

研究成果の概要（和文）：

地域住民の視点に立った地域環境保全を実現するために、地域住民とよそ者の協働プロセスを実験環境で再現することが本研究の目的である。初年度は、被災地復興に対するよそ者のかかわり方を明らかにする質問紙調査を行った。最終年度は、地域住民とよそ者の協働において、よそ者が地域住民に共感することの重要性に着目し、共感の発生を促すための実験研究を2件行った。

本研究では、よそ者による地域住民への共感発生までは実験環境で再現できたが、地域環境保全における両者の協働までは再現できなかった。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study is to replicate the collaboration process of local residents and strangers to achieve local environment conservation emphasizing residents' viewpoint. In the first year, questionnaire research was conducted to investigate how strangers relate to the 2011 earthquake disaster reconstruction process. In the last year, two experimental studies were conducted to promote strangers' sympathy for local residents in collaboration of local residents and strangers.

This study replicated the process of strangers' sympathy for local residents but not the process of collaboration of them in local environment conservation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	600,000	180,000	780,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：環境学・環境影響評価・環境政策

キーワード：よそ者、共感、物語、ライフストーリー、地域環境保全、RPG

1. 研究開始当初の背景

地域環境保全において配慮すべきなのは、地域環境と地域住民との文化的、歴史的なかわり方を含めて保全していくことである。なぜなら、地球環境と違い、地域環境は人との関わりの中で存在しているという特徴を持つため、地域環境保全のあり方には地域の固有性が伴うからである。そこで、環境社会学では地域環境保全において生活者の視点に立つことの重要性が主張されてきたが、生

活者の言い分が常に正しいとは限らない。住民だけでなく、行政、NPOなどの多数の主体がよそ者として、住民と協働しながら地域環境保全を行うことが必須である。そこで、よそ者が住民に共感できるかどうか、地域環境保全における大きな論点となってくる。なぜなら、地域には地域の文化的、歴史的な事情があるものであり、よそ者が地域住民と協働する上で、そうした地域の事情を理解し、住民に共感することが必須となるからであ

る。

2. 研究の目的

本研究では、住民の意思が反映された地域環境保全を実現するために、地域環境保全において住民とよそ者が協働していく動的プロセスを実験的に再現し、把握することである。

3. 研究の方法

共感発生を実験環境で再現する前に、まず、共感発生の条件を、質問紙調査による静的な局面で明らかにする。具体的には、仮想質問を設定し、仮想状況上の人物に対する共感を問う。心理学における共感の研究では、他者と何らかの類似性を持つ者は、他者に共感しやすい。そこで、質問紙では、回答者の属性、経験も問う。ただし、静的な局面では、共感発生を直接評価することは難しい。なぜなら、共感の対象となる仮想状況上の人物が、実際にどのような考え、態度を持つか、確認できないためである。そこで、共感しているなら確認できるであろう、関連する変数（利他的態度、自他の区別、他者ニーズの的確な把握など）に着目することで、間接的に共感発生を評価する。

次に、共感発生を実験環境で再現する。実験は2件行う。1つは、「文脈不一致型 RPG」と呼ばれる、木谷忍が地域住民に地域性への気づきを促すために設計した実験環境を用いる実験である。文脈不一致型 RPG において、よそ者は住民になりきって地域のあり方に関する議論を行う。これにより、よそ者は住民の価値観や意向を体験的に理解し、住民に共感できると考えられる。共感の発生は、住民の態度とよそ者の態度が類似したものになるかどうかで判断する。もう1つは、よそ者が地域住民にライフストーリー調査を行う実験である。心理学や看護学において、語りは他者理解を促すことが指摘されている。地域住民のライフストーリーを聞いたよそ者は、地域住民に共感できると考えられる。これも、共感の発生は、住民の態度とよそ者の態度が類似したものになるかどうかで判断する。

4. 研究成果

質問紙により共感発生条件を明らかにする調査を、2011年6月から7月にかけて、東日本大震災被災地復興に関心のある人（144名）を対象に行った。これは、被災地復興において、よそ者である支援者と被災者の連帯が不成立に終わる事例がみられるという問題意識のもと、支援者が被災者に関わり、被災地復興を有意義に行っていくための条件を明らかにするためにに行った研究である。事前調査として、神戸の学生ボランティアに面

接調査を行ったところ、被災地で被災者から支援を断られた経験や、子どもから暴力をふるわれた経験を聞くことができ、支援者と被災者の協働が必ずしもうまく働いていない事例を確認することができた。本調査で用いる質問紙では、被災者との類似性に関する質問として、過去の苦悩体験（家族との死別など）を問う質問を設定した。また、被災者との異質性に対する意識を問うため、「がんばろう日本」という、日本全体の一体感を促すフレーズに対する拒否感に関する質問を、被災者ニーズの把握を問うため、「被災者は今、何を必要としていると思うか」という質問を設定した。利他的態度を示す変数として、これまでに行った支援行動、これから行う支援行動についても質問をした。調査の結果、何らかの苦悩体験がある者の方が積極的に支援行動を取る傾向がみられた。また、苦悩体系のある者は、「がんばろう日本」というフレーズに抵抗を感じる傾向が強かった。さらに、「がんばろう日本」に抵抗を感じる者は、被災者ニーズの把握内容と、実際の支援行動の間に整合性のある傾向がみられた。以上より、東日本大震災被災地復興におけるよそ者は、何らかの苦悩体験を持つことで、被災者に共感しやすくなることが明らかになった。この結果は、よそ者である支援者が被災地復興において被災者とのかかわり方を見直す上での指針となりうる。

文脈不一致型 RPG による実験として、中国河北省張家口蔚県の伝統工芸品である「剪纸」をテーマに、地元の剪纸職人および高校生参加による戦略的討論の場（高校生が剪纸職人を演技する一種の RPG）を設定することで、高校生が剪纸という地域文化への理解を深めていくプロセスを評価した。ここで、「住民」に当たるのは職人であり、「よそ者」に当たるのは高校生である。高校生は地域住民でもあるが、まだ地域に根づくほど地域活動に携わっていないし、卒業後は都市に出て働きたいと考える者も多い。したがって、高校生は「将来的に地域を担う存在になる可能性があるが、まだ確定していない」という意味で、よそ者であると見なせる。地域の伝統文化を守っていく上で、将来世代となりうる学生（よそ者）が、現在世代へ共感することで、地域文化への理解を深めることは重要である。実験は、2012年8月下旬に行った。まず、対象地の高校の1クラス（1年生）に質問紙調査を行い、地域文化に対する態度、剪纸に対する態度（誇りの有無など）を確認した。その上で、担任のアドバイスと、質問紙の結果をもとに、演技者となる高校生3名を選出した。選出の基準は、コミュニケーション能力が高いこと、そして剪纸に対して偏った態度を持っていないこと（平均的な態度を持っていること）である。次に、高校生3名がそ

れぞれ別々の剪紙工場の工場長を対象に面接調査し、工場長を演じるために必要な情報を収集した。なお、工場長には研究者側で事前調査を行っており、3名の工場長のうち、2名は剪紙を手作りで製造することにこだわっていること、1名はまだ若い工場長で、手作りにそれほどこだわっていないことが明らかになっている。したがって、高校生が工場長に共感していれば、剪紙に対する態度が変容し、演じられる工場長の態度に近づくと考えられる。RPGの結果、演技者が職人に共感する傾向は見られなかったが、RPGの様子を観察していた高校生（前述のクラスから3名をのぞいた48名）には、工場長に共感し、工場長が重視する剪紙の製法（手作りか、機械か）への理解を深める傾向がみられた。

ライフストーリー調査による実験については、東北大学農学部で農業経済学を専攻する学生7名を対象に、山形県最上町の農業者へライフストーリー調査を行う実習を実施し、学生の感想文分析から、農業者に対する共感発生を評価した。これは、将来的に農業政策者となる可能性の高い農業経済学専攻の学生に、農業者の視点から農業について考える契機を与えることが、農業に対するものの見方に与える影響を確認することが目的である。座学で農業について学ぶ学生は、農業を一般論として学ぶが、現実の農業は非常に多様性があり、一般論では把握しきれない。そのような、一般論では把握しきれない豊かな現実気づくことで、農業について、杓子定規でない、きめ細やかな配慮ができるようになると考えられる。実験は、2012年11月から12月にかけて行った。学生は、事前に文献で最上町について学習した。この際用いたのは、前年度、同様に最上町を訪れた学生による報告書である。前年度（2011年度）の学生は、最上町をマイクロバスで周遊し、行政職員の説明を聞きながら最上町の産業について学習した。前年度は、語りを聞くという局面がないため、報告書の内容も、最上町に関する情報が主に入ったもの（価値判断があまり含まれていないもの）である。2012年度の学生たちは3グループに分かれ、事前に質問項目を各グループ20個程度用意し、実習にのぞんだ。実習終了後、学生たちに感想文を書かせた。2011年度と2012年度の学生の感想文を比較した。比較の手法は、内容分析(content analysis)で、感想文の各センテンスをコーディングし、感想文全体の中で占める各分類センテンスの割合から、感想文の傾向をみた。コーディングの際にとくに着目したのは、最上町の農業を一般論的に捉えたセンテンスであるか、最上町の個別具体的な側面に配慮したセンテンスであるかである。最上町の農業者に共感していれば、個別具体的なセンテンスが多く書かれると考えられる。

感想文比較の結果、2012年の学生の方が最上町を個別具体的に捉えるセンテンスを多く書く傾向がみられ、一般論的に捉えるセンテンスはあまりみられなかった。次に、2012年度の学生のデータを個人別に分析した。まず、ライフストーリー調査中の、学生の聞く態度に着目して、あいづちを打つ頻度、その場で新たに思いついた質問の数をカウントした。その結果、実家が農村であるか、家族に農業者がいる学生の方が、あいづち頻度が高いか、質問の数が多傾向がみられた。また、このように聞く態度が積極的な学生ほど、農業者に共感して、最上町の農業を一般論に解消することなく、個別具体的な側面に配慮して感想文を書く傾向がみられた。感想文の年度間比較から、ライフストーリー調査実習に参加した学生の方が、農業者に共感した感想文を書くことが明らかになり、また、2012年度の感想文の個人別分析から、ライフストーリー調査実習の中でも、「語りを聞く」という局面が、共感発生を促すことが特定できた。この結果は、単に農業経済学を専攻する学生のための実習でライフストーリー調査実習が重要であることを示すだけでなく、よそ者が地域に関わる際に、地域住民の語りを聞くことが有効であることを示している。

本研究の成果は、環境社会学で議論されてきたよそ者論に、量的研究・実験研究の要素を導入したものであると位置づけられる。地域でよそ者を実際に活用しようとする場合、よそ者と住民の協働を再現するための条件が明らかでなくてはならないので、こうした研究はこれからさらに必要になると思われる。なお、本研究では、よそ者による地域住民への共感発生までは実験環境で再現できたが、地域環境保全における両者の協働までは再現できなかった。現在は、よそ者が地域住民に共感することによって、地域環境保全における両者の協働が有意義に行われることを評価するために、ライフストーリー調査とKJ法等の合意形成手法を組み合わせた地域環境保全支援ツール開発に取り組んでいる。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

（1）小山田晋、長谷部正、木谷忍、安江紘幸、伊藤まき子、東日本大震災被災地復興に対するよそ者のかかわり方に関する倫理学的研究、農業経済研究報告、査読有、第43号、2012、15-36

〔学会発表〕（計5件）

①小山田晋、農業者の視点に立つためのライ

フストーリー調査実習に関する実験研究、日本農業経済学会、3月30日・2013年、東京農業大学

②小山田晋、Role of Sympathy in Forming Mutual Aid Communities after Disasters、Scientific Workshop with Tohoku University 11 March 2013 at UNU-EHS in Bonn、3月11日・2013年、UNU-EHS in Bonn, German

③小山田晋、災害発生後における相互扶助共同体形成の契機としての共感の役割に関する研究、東北大学ラウンドテーブル「ヒューマンセキュリティの観点から考察する大震災後の諸相」、2月11日・2013年、東北大学

④小山田晋、Role of Sympathy in Forming Mutual Aid Communities after Disasters: Focusing on Supports' Consciousness after 2011 Tohoku Earthquake and Tsunami、Dimensions of Human Security Session Program, The Second Annual Conference of Japan Association for Human Security Studies、9月30日・2012年、愛知大学

⑤小山田晋、東日本大震災被災地復興に対するよそ者のかかわり方に関する研究、日本環境共生学会、9月18日・2011年、立命館大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小山田 晋 (OYAMADA SHIN)

東北大学・大学院農学研究科・教育研究支援者

研究者番号：90593137

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：